

競馬がますます
楽しくなる

続 ファンにやさしい

馬学講座

第28回

意味はないけれど繰り返す馬の癖をひもとく

講師

楠瀬 良さん

(公社)日本装蹄協会の
常務理事



案内人：辻谷 秋人
text by Akihito Tsujiya

理由のある「癖」と
理由のない「癖」

今回は本馬場入場時にグルグル回るハクサンムーンの行動を取り上げたが、今回はさらに「馬の癖」について考えてみよう。お話いただくのは引き続き、日本装蹄協会の楠瀬良さんだ。

一般的にいわれる「馬の癖」は、大きく二種類に分かれる。

ひとつは、人間や他馬に噛みつく「咬癖」や同じく人間や他馬を蹴る「蹴癖」、人の指示に従わずに動かなくなってしまう「膠着」や後ずさりをする「後退癖(あとびき)」などの異常行動だ。

「これらは攻撃欲求や恐怖が原因で、その意味でははっきりとした理由がありま

す。また恐怖を感じたときの動物の行動として当然のものであるともいえます。ただ、それは人間にとっては都合の悪いものなので、異常行動、悪癖ということになるのです」

楠瀬さんによれば、これらの異常行動は、学習によって獲得・強化される。たとえば乗馬において障害の前で膠着したら飛ばずにすんだとする。馬は、膠着すれば飛ばないですむと学習することになる。こうした悪癖は懲罰などの手段で矯正することも不可能ではない。

馬の癖のうちひとつのパターンが「理由や機能はつきりしないもの」だ。咬癖や蹴癖、膠着などは、この点ではつきりと異なる。

この「意味がないけど、同じことを繰り返す」癖が、異常行動の中でも常同行動と呼ばれるもので、前回も説明したようにハクサンムーンの旋回癖もこれに含まれる。

快感と結びついた「癖」は
矯正することが難しい

馬の常同行動として知られているのが、体を左右に揺する「ゆう癖(熊癖、ふなゆすり)」や、上歯を馬栓棒や壁板に当たてて空気を飲み込む「さく癖(グイッポ)」などだ。

「こうした行動は馬に限ったことではなくて、牛やキリンが舌を出して無意味に

舐めまわしたり、熊が体を揺すったり(ゆう癖の名はこれが由来)、北極熊が同じところを行ったり来たりするなどの例があります。人間でも貧乏ゆすりなどがこれにあたります」

これらの常同行動のデメリットとして、さく癖であれば腹痛を起こしたり、旋回癖なら不要な疲労を感じたりといったことがあげられるが、面倒なのは矯正が難しいことだ。

「これらの行動は快感と結びついているんです。行為自体が気持ちいいということでもあるし、別の快感とセットになることもあるんです」

例えばさく癖のある馬では、えん麦などの濃厚飼料を食べる時間になるとさく癖の頻度が高くなる。濃厚飼料は牧草よりもずっと好きなので「美味しいものを食べられる」という快感が、さく癖と結びついてしまうのだという。ゆう癖についても同じような傾向が見られるのだそう。

そういえばハクサンムーンが厩舎で見せる旋回癖も、厩舎に人が入ってくると始まることが多かったとのこと。人が好

きで、人にかまってもらうのが大好きなハクサンムーンにとっては「遊んでもらえる」という快感が旋回癖と結びついているのかもしれない。

快感と結びついているだけに、常同行動をやめさせるのは難しいのだという。実際に常同行動が動物のストレス解消に役立つという報告もある。こうした癖は無理にやめさせようとするより「上手につきあっていく」ことを考えるべきだろう。

写真提供/楠瀬良



癖自体が快感な行為だけでなく、快感な行為を期待し癖が出る場合もある